様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月　20 日現在

機関番号：３４４０４
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１７００６４９
研究課題名（和文）　国内タレント発掘事業の評価に関する調査研究

研究課題名（英文）　Assessment of talent identification program in Japan.

研究代表者
谷所　慶（TANISHO KEI）
大阪経済大学・人間科学部・准教授
研究者番号：80455443

研究成果の概要（和文）：
現在日本の各自治体において、スポーツタレント発掘・育成事業が実施されている。本研究は主要な事業のシステムを調査し、その評価選考方法や育成プログラムについて比較するとともに、競技種目選択に関する動向について調査することを目的とした。各事業ともそれぞれの利点を活かす工夫がなされ、多様な選手育成がなされることがうかがえた。また競技種目選択に際して、選手は自らの身体能力や経験よりも、他者の評価を重要視する傾向がうかがえた。

研究成果の概要（英文）：
Some talent identification projects are undertaken in Japan. The purpose of this study was to compare these systems and to investigate the decision-making about the choice of sports event. Each project implements many creative programs, different types of athletes were brought up. The athletes tend to attach importance to others' assessment than their own physical capabilities or experiences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：複合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、スポーツ科学
キーワード：スポーツ・タレント

１．研究開始当初の背景

我が国の国際競技力を安定的に高水準に維持・向上するために、素質ある人材を発掘し、組織的・計画的に育成することは、極めて重要な課題である。文部省（現・文部科学省）は 2000 年 9 月、スポーツ振興基本計画を策定し、我が国の国際競技力の総合的な向上方策において、政策目標達成のために必要不可欠である施策の一つとして「一貫指導システムの構築」を掲げた。この中では優れた素質を有する競技者を組織的かつ計画的に

発掘・育成することの必要性が述べられており、その具体的施策の一つがタレント発掘・育成（Talent Identification and Development; 以下 TID)プログラムである。

TID 事業の成否を決定付ける大きな要因は、いかに組織的かつ計画的に、または合理的に児童達を発掘し、育成していくかという点にある。しかし、その成否は長期にわたる観察によって得られるものであり、即座に結果が明らかになるものではない。したがって、発掘・育成手法において、常にその事業目的に適したシステムあるいはプログラムを試行錯誤し、また事業の評価を行い、改善し続けていく必要がある。

２．研究の目的

（１）現在日本で実施されている主要な TID 事業のシステムを調査し、その評価選考方法や育成プログラムについて比較することを目的とした。

（２）TID 事業で提供されてきた様々なプログラムや情報が、今後実施していく競技種目の決定に及ぼす影響について検討することを目的とした。

３．研究の方法

（１）各 TID 事業のシステムについては、実施主体の主たる人物にヒアリング調査を行ない、情報を収集した。調査項目は、実施主体、主な活動拠点、財源、発掘・育成手法、および TID 事業の効果、等であった。

（２）TID 事業を修了した，高校１～３年生を対象にアンケート調査を行った．調査は郵送法を用い，全修了生 72 名に記入を依頼した．回収率は 91.7%であった．

調査内容の概要は，種目転向の有無、種目転向に対する当初の考え、種目転向をした（あるいはしなかった）理由、種目決定にあたり重要であったプログラム、人物、および情報、等であった。種目転向をした群としなかった群に区別し、両群のプログラムに対する認識の差異をカイ二乗検定を用いて分析した．また種目決定に際して実施されるパスウェイプログラム（体験教室プログラム（事業者側が主催する競技体験)、競技体験プログラム（競技団体側が主催する競技体験)、オーディションプログラム（競技団体による身体能力評価会)、三者面談プログラム）に対する評価（得点）の差異は t 検定を用いて分析した。

４．研究成果

（１）各 TID 事業のシステムについて、本報告書では、種目非特化型事業からは福岡県（2009 年）と和歌山県（2010 年）について、また種目特化型事業からは山口県（2009 年）について簡潔に記述する。

福岡県では県立スポーツ科学情報センターと県体育協会が実施しており、教育委員会は共催として関与している。主な拠点は県立スポーツ科学情報センターである。財源については平成 2 年の福岡国体の際に生じた余剰金をもとに基金を設立し、その運用益が事業費に用いられている。福岡県の主な特徴は、小 5 から中 3 までの一貫育成プログラムと、医科学センターを併設した拠点をもっていることであり、これは選手育成の面でも大きな利点となる。年々応募者数が増加しており、平成 21 年度の応募者数は約 2 万人となっている。またジュニアレベルでの国際大会や全国大会に出場する児童も輩出している。

和歌山県では、県教育委員会が主として実施している。主な拠点は特に定めておらず、県内全域の体育施設を使用している。財源は全てが県費である。主な特徴は、中学以降の競技種目選択に際し、強化体制の整った中学へ進学できるよう学区が弾力化されていることである。また直接児童に対して食育プログラムを行っており、教育的な側面も強い。県内の小学校に対する事業認知度はほぼ 100％であり、県競技団体や保護者の参加意欲も非常に高い。

山口県ではレスリングとセーリングを対象とした種目特化型事業であり，県体育協会が実施している．主な拠点は、海洋スポーツ施設もある山口県スポーツ交流村およびやまぐちスポーツ医・科学サポートセンターである．またレスリングは近隣の大学のレスリング施設も使用しており、両競技とも育成環境は整っている。財源は県費（山口県トップアスリート育成事業）および toto 助成金等を充てている。この 2 種目は，山口県の地域特性，すなわち指導者や育成環境の存在を活かして戦略的に設定されている．選抜の段階ではレスリングおよびセーリングに特化したテストも実施される．事業にはスポーツ医・科学センターの職員も参加しており，指導や測定の知識及び設備を併せ持っている．受講者は少数ながらも，整備された環境の中でプログラムが実施されており，トレーニン

グの質・量ともに優れている．

（２）種目転向をした群としなかった群において，“種目転向に対する当初の考え（積極的であったか消極的であったか）”に差異は見られず，どちらの認識でもパスウェイプログラムを経て種目転向する（あるいはしない）可能性があることが示唆された（図 1）．

また“パスウェイプログラムの満足度”にも差異はみられなかった．各プログラムの内容は両群とも満足しており、受講者にとって重要であったことは間違いないものの、種目転向の意思決定に際しては多大な影響を及ぼしていないものと考えられる（図 2）。

種目転向をした（あるいはしなかった）理由は、“勝てそうだから”“その種目が好きだから”“他者からの評価が高かったから”“育成環境・進学環境その他が良かったから”の４種類に大別された。両群で比較してみると、転向した群は“他者評価”を理由にした割合が最も高く、次いで“勝てそう”を理由に挙げていた。一方で、転向しなかった群は“(今まで実施してきた種目が）好きだから”の割合が最も多く、他者評価を理由に挙げた者は皆無であった（図 3）。

その他、種目転向をした群はしなかった群に比べ，“競技人口情報”(p<.01，図 4）や“競技団体からの評価”を重要視する傾向にあった。その一方で“身体能力評価表の情報”(p<.05，図 5)や“自己分析情報”を重要視していないことも示唆された．

以上より，現在の自己の情報（内的要因）よりも，競技環境や外部からの評価（外的要因）が種目転向の意思決定に影響を及ぼしているものと考えられる．これは，種目転向をしなかった群が“競技団体コーチ”からの影響を受けていなかった（p<.05）ことからもうかがえる．

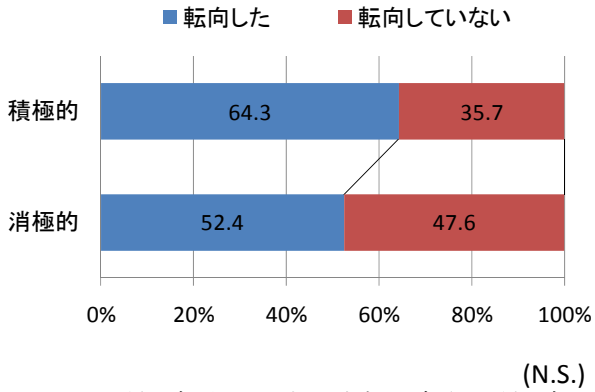

図 1　種目転向に対する当初の考えと種目転向の結果

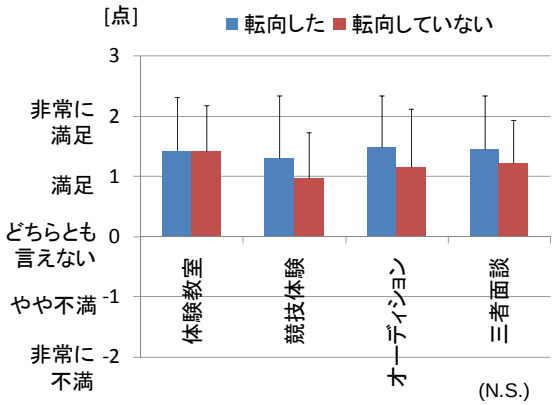

図 2　各パスウェイプログラムに対する満足度

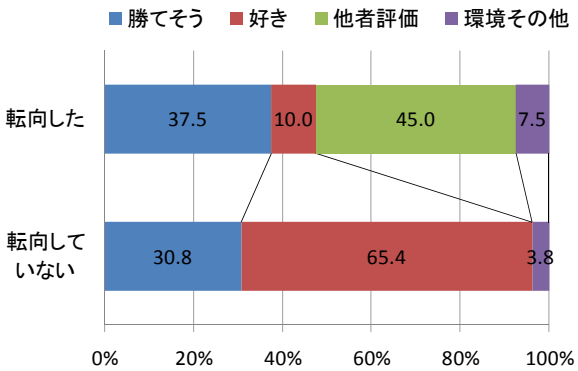

図 3　種目を転向した（あるいはしなかった）理由

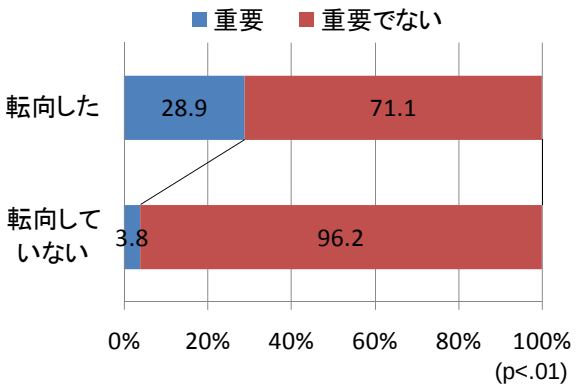

図 4　“競技人口情報”に対する認識

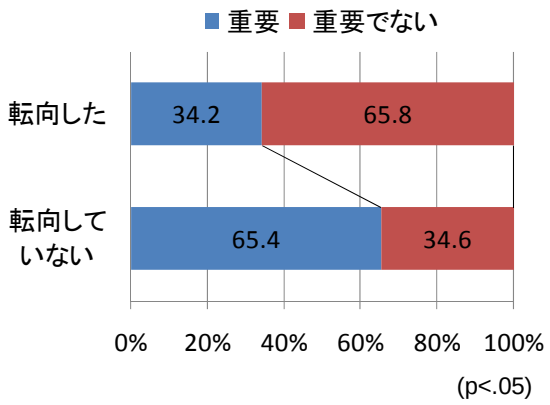

図 5　“身体能力評価表の情報”に対する認識

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①勝田隆、久木留毅、山下修平、松井陽子、谷所慶、吉澤新、杉田正明、スポーツ界におけるタレント発掘・育成、トレーニング科学、査読無、22(3)、2010、147-154

②谷所慶，阿部篤，杉田正明，和久貴洋、スポーツタレント発掘・育成事業における種目適性基準の策定手法とその妥当性、トレーニング科学、査読無、22(3)、2010、165-168

③谷所慶，山下修平，和久貴洋、ジュニアアスリートと一般児童の身体能力の比較―スポーツタレント発掘事業と児童の体力―、体育の科学、査読無、61(3)、195-201

〔学会発表〕（計 2 件）

①谷所慶、彦次佳、スポーツタレント発掘事業における種目転向に関する調査、大阪体育学会、2011 年 3 月 18 日、関西学院大学

②谷所慶、彦次佳、スポーツタレント発掘事業におけるパスウェイプログラムに関する調査、兵庫体育学会、2011 年 5 月 19 日、兵庫県立大学

６．研究組織

(1)研究代表者

谷所　慶（TANISHO KEI）
大阪経済大学・人間科学部・准教授
研究者番号：80455443

(2)研究協力者

彦次　佳（HIKOJI　KEI）
和歌山大学・教育学部・講師
研究者番号：30637062